随想

「必要とされればどこへでも行く」

特定非営利活動法人アムダ
AMDA理事長　菅波　茂

「必要とされればどこへでも行く」とは、AMDAの緊急人道援助のスローガンである。

緊急人道援助の歴史は一九九一年から始まる。ミャンマーの政治的内紛によりイスラム教のロヒンギャ族がバングラディシュに難民として流入した。私たちは日本の大学院に留学していたバングラディシュの医師を団長にして救援医療チームを派遣した。バングラディシュのマスコミをあげての大歓迎であった。バングラディシュ政府も外国のNGOが活躍する場合にはNGO登録するのに三ヶ月かかるところを三日間でしてくれた。なぜここまでバングラディシュはAMDAの救援医療チームを大歓迎してくれたのか。理由はただ一つである。バングラディシュの医師が団長であったからである。この救援活動からの教訓として、「援助を受ける側にもプライドがある」という原則が確立した。ちなみに、AMDAの人道援助の三原則を紹介したい。

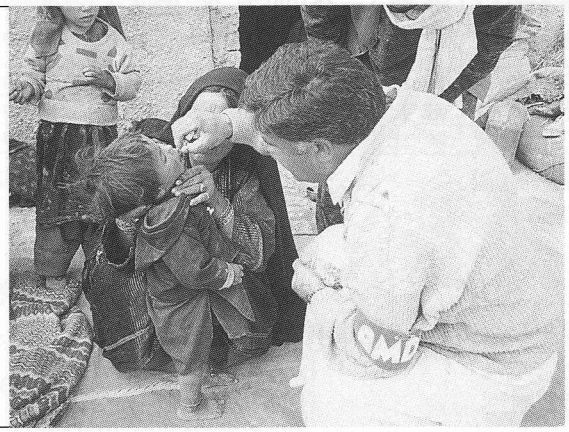
アフガン難民医療救援プロジェクト
日本から派遣の医師・看護婦とAMDAパキスタン支部の医師とで編成したAMDA

一）誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある。

二）この気持ちの前には民族、宗教そして文化などの壁はない。

三）援助を受ける側にもプライドがある。

援助を受ける側のプライドとは「自分たちも社会から必要とされたい。社会から認められたい」という人間のぎりぎりの尊厳である。この原則に共鳴してアジア、アフリカそして中南米などにAMDAの支部が増えてきている。この国際ネットワークがAMDAの緊急人道援助の命になっている。例をあげる。一九九八年のハリケーン「ミッチ」の被害を受けたホンジュラスやニカラグアには日本、カナダ、ボリビアそしてペルーの四カ国が参加。二〇〇一年のインド西部大地震には日本、ネパールそしてインドの三カ国が参加。これをAMDA多国籍医師団と命名している。診療に必要な言葉、社会習慣、風土病などの問題を克服することができる。カナダ支部などはホームページによって瞬時に数十名の参加希望者を集めている。日本でも世界で災害が起こると参加希望者が本部に問い合わせてくれる良き時代となってきた。二〇〇一年一一月からのアフガニスタン難民救援医療チームを派遣した時にも、治安の危険性があるにもかかわらず多数の若い医療従事者が応募してくれた。現在もアフガニスタンの国境にあるクエッタを中心に国連高等難民弁務官事務所と契約して難民キャンプでの巡回診療を展開している。NGOは「命の普遍性」を大切にする活動を実施している。人を自殺させない。人を野垂れ死にさせない。そのために緊急人道援助、地域保健医療そして貧困対策のプログラムを用意している。地域保健医療はネパール、カンボジアそしてミャンマーに医療機関を設立して運営している。貧困対策として職業訓練や小規模融資（起業を支援するた



多国籍医師団によるパキスタンのアフガン難民キャンプでの巡回診療と保健支援（子ども達への予防接種投与）

めの低利の融資）をアジアやアフリカで実施している。ＡＭＤＡのめざすところは何か。なぜ人道援助を行っているのか。それは「多様性の共存」である。ものの見方や考え方の異なる人達が共に人道援助を実施する過程で「尊敬と信頼」の人間関係をつくりあげることである。この人間関係が財産と考えている。その延長線上に「人道援助安全保障構想」を夢見ている。軍事の安全保障とお金による安全保障に加えて第三の安全保障である。その理念は「命の普遍性」である。

貧困対策としての自立支援プロジェクト

生活環境向上を目的に、職業訓練（裁縫・大工）や、低利の少額融資を実施し、収入を得るための起業を支援